

2005年9月1日プレスリリース

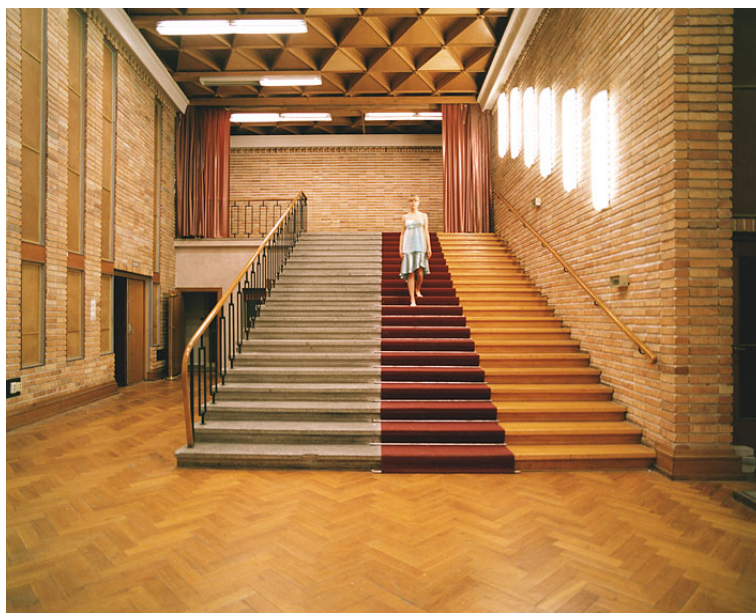
山口情報芸術センター(YCAM) presents

日本におけるドイツ 2005/2006

ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニ/新作インスタレーション展

「Radio Solaris / $-273,15^{\circ}\text{C} = 0 \text{ Kelvin}$ 」

(ラジオソラリス / $-273,15^{\circ}\text{C} = \text{ゼロケルヴィン}$)



日時：2005年10月1日（土）～11月27日（日）（※火曜および10月27日休館）

10:00～20:00（入場は19:30まで）

会場：山口情報芸術センター スタジオ B ほか

入場無料

<http://www2.ycam.jp/radiosolaris/>

プロジェクト・キュレーター：阿部一直（YCAM）

主催：財団法人山口市文化振興財団

後援：大阪ドイツ文化センター、山口市、山口市教育委員会

助成：財団法人野村国際文化財団

特別協力：Galerie EIGEN+ART Leipzig / Berlin

製作：YCAM Intelab

企画制作：山口情報芸術センター

山口情報芸術センター(YCAM) presents

[日本におけるドイツ 2005/2006]

ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニ／新作インスタレーション展

「Radio Solaris / -273,15°C=0 Kelvin」 (ラジオソラリス / -273,15°C=ゼロケルヴィン)

現在の社会や制度の中で、不可視のまま横たわっているものの構造に目を向け、それらに対して毎回異なる斬新な方法論とメディアのアプローチによって喚起するアートプロジェクトで知られるアーティストユニット<ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニ>。今回の新作は、20世紀ヨーロッパの様々なイデオロギーの変動と歴史・文化を深く反映し、また彼らが現在居住するリアルな場所でもある都市<ベルリン>を題材に、「都市-建築」を記憶のメディアとして注目した作品を発表します。現在は廃墟となりながらもいまだ市内に残る旧東ドイツ時代の建築物を、きわめてエレガントな長廻しによるドキュメント映像(ワンシーンワンショットの移動撮影)で捉え、さらにそこから派生するイリュージョンや、さまざまな映像や記号の引用を組み合わせた独創的なマルチプロジェクションによるメディアインスタレーションを、YCAMで制作展示します。

※この作品は、最初ライブツィヒ(ドイツ)で発表されたもので、今回YCAMでの滞在制作をへて大幅に内容を改訂し、日本での撮影ロケを含めた最新バージョンとして発表します。

展示作品

(日)“Radio Solaris / -273,15° C=0 Kelvin”

「ラジオ・ソラリス / -273,15°C=絶対零度」メディアインスタレーション／スタジオB

(月)“Palast der Republik Berlin”

「パラスト・デア・レプブリーク(共和国会館)」映像インスタレーション／スタジオC前

(火)“Panorama Berlin - TV Tower of the Alexander Platz”

「パノラマ・ベルリン-アレクサンダー広場TVタワー」映像インスタレーション／2F大階段脇

(水) Screening of “TOKYO STAR”

「TOKYO STAR」映像インスタレーション／1F公園口正面

(木) “A film works collection of Fischer / el Sani”

フィッシャー&エル・サニ／映像作品集／2F大階段脇

作品解説

「Radio Solaris / -273,15°C = 0 Kelvin」～建築の中に読み解かれていく社会とリアル～

ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニは、これまでキルリアン写真 (Aura Research) やミケランジェロ・アントニオーニの映画 (L'avventura senza fine)、アングラのクラブスポット (Phantom Clubs Berlin/Liverpool) など、それぞれ異なるメディアの表層に刻印されたまま見過ごされてきた社会事象の痕跡、現在との距離や影響、想像的關係性を、独自の方法で再生させ、鮮やかな手法でインスタレーションとして展開してきました。今回の「Radio Solaris / -273,15°C = 0 Kelvin」では、ベルリンに残る旧東ドイツ (ドイツ民主共和国) 政権下に建設された<ラジオステーション>の建築物としての存在の奇妙さに注目し、オールロケ撮影をおこなっています。そこには、東・西ドイツ双方のリアリティを持ちつつ、分断/融合された歴史に対して相対的な視点を導入し得るアーティストの独特の世代、環境、文化、メディア観などが大きく反映しています。

当時の社会主義国家においては、ラジオステーションとは、あたかも音で、自然を～世界を～存在を、メディアによって冷凍保存し、再生する都市の中の実験装置でした。唯物主義イデオロギーのレコーディングマシーンとして、当時のあらゆるテクノロジーを注ぎ込んで作られたこの最先端施設は、驚くことにレコーディング用のオーケストラホールのような巨大な空間が、ノイズを避けるために空中に宙吊りにされて設計されています。しかし建物自体が過去の残骸となり、利用する者もない空虚な空間となったこの施設のもたらす意味は？ 分断と壁崩壊、統一を経て、現在ドイツの首都として巨大なEU経済圏のなか浮かぶ都市ベルリンの歴史の表層と真相を背景に、これらは完全に葬り去られた過去となってしまったのでしょうか。

今回の映像音響インスタレーションでは、ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニは、やはり冷戦時代の共産圏の時代精神を色濃く反映し、にもかかわらず非限定的な人間存在の課題にまで飛躍したモチーフを共存しえた映画作品=アンドレイ・タルコフスキー「惑星ソラリス」(原作: ポーランドの作家スタニスワフ・レム「ソラリスの陽のもとで」) にフォーカスを当て、ベルリンの<ラジオステーション>の廃墟と「惑星ソラリス」の探査ロケットを、作品中で記憶の二重露出にしていきます。その中で、人間のあらゆる記憶に働きかけ、刻印された痕跡を物質化する未知の天体ソラリスと、すべての存在様式を情報化=メディアライズして再生可能する現在の人間の技術社会は、遠く隔たったものなのだろうか、という問いかけが生まれます。音によるリアルな存在物の人工的再生技術を究極のテクノロジーとして突き詰めた<ラジオステーション>における現在との距離と相違。ここでニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニは、到達できないもの(=絶対零度)への手法を、メディアに写像する人間と技術社会の特異さを周到に読み取っていきます。

壮大かつ独創的なインスタレーション

作品空間は、渦巻き型に横に連続する壮麗な10面のマルチプロジェクションによる映像音響インスタレーションです。映像は基本的に<ラジオステーション>を題材にした移動撮影によるワンショットで構成されますが、それが撮影するラジオステーションの部屋ごとに、2重に撮影され、一方はリアルな空虚空間として、もう一方にはタルコフスキーの「惑星ソラリス」に登場する物体や、ゲルハルト・リヒターの絵画からのモチーフなど、記憶からの虚構の現実化が、社会主義リアリズムを体現した壮大な空間に追加された現在となって、陶惑的な優雅さに満ちた現在進行形の主観映像（第1人称映像）が展開されていきます。それらは採録（過去）と再生（現在）された2重の虚構として同時に始まり絡まり合いながら微妙な差異を生み出していきます。今回さらに、YCAM展での新たな映像素材として、「惑星ソラリス」の中に出てくる、1972年前後に撮影された日本の赤坂周辺の首都高速の風景に、同景同寸のショットで撮影された、2005年の現在の東京の首都高速の風景が対比されていきます。

※ 題名の「Kelvin」とは、絶対温度の科学基準を指す（Kelvin温度）と同時に、タルコフスキー監督作品映画「惑星ソラリス」に登場する、最初のソラリス探査で探査衛星に乗り込んでいた物理学者クリス・ケルヴィン博士の名前からとられています。「 $-273,15^{\circ}\text{C}=0\text{ Kelvin}$ 」とは、摂氏 $-273,15^{\circ}\text{C}$ が示す絶対零度、すなわち人間が到達できない環境を表します。また同様に、タルコフスキーの「惑星ソラリス」では、未知の天体ソラリスが人間の脳に反応して記憶を物質化する事態が描かれ（死んだはずの妻が眼前に再生するなど）、ソラリス探査と人間の存在を探求することと平行となり、人間自体が到達できない物理的かつ形而的な限界に直面するメタファーとなります。

※ このほかに同じく都市における社会主義的象徴として利用されたベルリンの「Palast der Republik（共和国宮殿会館）」の現在の廃墟を撮影したインスタレーションやアレクサンダー広場のTVタワーの映像作品、これまでの映像作品集を、関連展示として同時に展示します。

アーティストプロフィール

ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニ：1993年よりコラボレーション作品を発表。

■ニナ・フィッシャー Nina Fischer

1965年エムデン（ドイツ）生まれ。1992年芸術アカデミー（ベルリン）ヴィジュアルコミュニケーション学科卒業。1989～90年リートフェルト・アカデミー（アムステルダム）オーディオヴィジュアル学科。現在ベルリン在住。

■マロアン・エル・サニ Maroan el Sani

1966年デュースブルグ（ドイツ）生まれ。1995年ベルリン自由大学修士課程コミュニケーション&映画学科修了。現在ベルリン在住。

■主な個展

- 1998年「アウラリサーチ」東京都写真美術館（東京）
- 1999年「ツナミ」コンテンポラリーアート・シティーギャラリー（ドレスデン）
- 2000年「ミレニウマニア」ゲーティンスティテュート（パリ）
- 2002年 EIGEN+ART ギャラリー（ベルリン）
- 2004年 EIGEN+ART ギャラリー（ライプツィヒ）

■主なグループ展

- 1993年「NEW Products from the chaos」（ベルリン）
- 1995年「韓国ビエンナーレ 95」（ソウル）
- 1998年「ベルリンビエンナーレ」（ベルリン）、「リバプールビエンナーレ（リバプール）」
- 2002年「マニフェスタ 4」（フランクフルト）、「シドニー・ビエンナーレ」、「光州ビエンナーレ」、「QUOBO/ベルリンのアート 1989-1999」（東京）
- 2004年「Sonar Sound Festival」（東京）、「Made in Berlin」（ベルリン）
- 2005年「GLOBAL PLAYERS」（東京）、「Superstars」（ウィーン）、「Criss Cross」（ザグレブ）

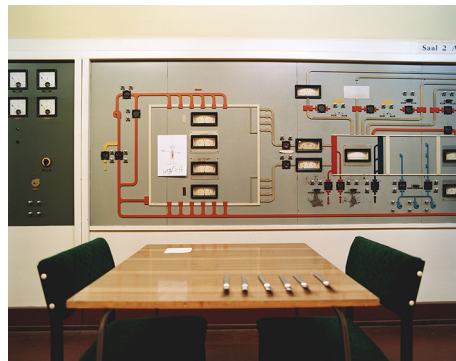
■主な映画・映像・ビデオ

- 1996年「ファミリーランド」ショートフィルム（16mm、11分）
- 2000年「再会」ショートフィルム（16mm、15分）、「がらくた」ショートフィルム（Beta SP、14分）
- 2001年「香港は謳う」ドキュメンタリー（Beta SP、20分）
- 2002年「ミヒャエル・バルハウスとのロケーション」ベルリン-ブランデンブルクのためのCF（35mm、2分）
- 2004年「TOKYO STAR」（Digi Beta, 78分）
- 2005年「Radio Solaris / -273,15°C=0 Kelvin」（DVD, multi-screen, 24min-Loop）

「RADIO SOLARIS」 文／ニナ・フィッシャー&マロアン・エル・サニ

ラジオステーション

われわれがこのプロジェクトをはじめたのは2004年である。以前東ドイツに属していたこのラジオステーションを訪れてみたのだ。それは現在、完全に空虚な建物であったが、建築はわれわれを圧倒的するもので、特に放送用のスタジオはすばらしいものだった。このスタジオは、DDR（東ドイツ：ドイツ民主共和国／1949 建国）の新しい社会主義的主張を体現する文化的放送コンテンツを制作するためのもので、ワルター・ウルブリヒト（DDR 初代大統領）はこのよう



に述べたものである。「放送、特に文化放送は、われわれのリアリティの芸術的認識やデザインを形作る創造性に満ちた方法である。文化的革命こそは、社会主義の基礎をなす部分になるものの一部なのだ」と。アーティストももちろんそこに含まれていなければならなかった。経済と文化、政治と文化は完全にセットで構想されていたのである。

第2次大戦後のドイツにおいて、＜放送＞はアメリカ、イギリス、フランス、ロシアの戦勝4大国の重要なツールとして想定されていた。まさにそれと同じ理由により、社会主義政府（東ドイツ）が自らの内に、近代的ラジオステーションを早急に建設することを求め、それを建築家フランツ・エーリッヒに発注したのである。

建築家フランツ・エーリッヒ

エーリッヒは、バウハウスアカデミーに学び、西ベルリンのラジオステーションを設計した建築家ペルツィックのアシスタントであった。この東ベルリンのラジオステーションは、1951年から56年の間にオーベルシェーネヴァイデに建てられた。彼の他のプロジェクトとしては、アドラーショフ、トレプトアーのTV局（1956-57）などがある。



ソラリス

何も無いラジオステーションに入った時、われわれは、タルコフスキーの「惑星ソラリス」に登場するケルヴィン博士になったような気分になられた。そこでは、ミステリアスなドアがあり、どこに行き着くか知れない階段が続く。それぞれ異なる表情をもつ回転壁、不規則な角度で作られた部屋、ホールへ向かう通路には巨大な電源盤がいたるところにある。全ての部屋に装備されたエアコン、はりめぐらされた特殊なコミュニケーションシステム、建物の基礎地面から何も接続なしに空中に吊られた巨大な空虚な空間…。

この場所を知るにつれ、その全ては、放送プログラムのための能う限りのベストサウンドを得るために構築された建造物なのだということがわかる。サウンドをできるだけリアルにするために、ある種のリアリティ、それ自体が社会主義

的な世界、そのサウンドを創りだすのだ。

ここにわれわれはタルコフスキーのフィルムとの相似性を見いだす。「惑星ソラリス」に出てくる）ケルヴィン博士はたびたび訪れる「お客」、つまり彼の無意識の物質化、彼女についてのケルヴィンの記憶の物質化した「人」にまみえるのである。（注：映画では、未知の天体ソラリスは、観測者の脳に働きかけ、人の強く記憶に残るものをニュートリノ系の物資によって物体化する性質がある、とされる。それを映画では「お客」と呼んでいる。）

社会主義的思想のリアル化の帰結であるラジオステーション、人間の最後の問い（人間とは何か、何が人間ではないのか）を解決しようとしたソラリスの宇宙ステーション。この双方のユートピアとも使命をもち進みながら、成功することとはなく、その後粛清に見まわれた。

ラジオステーション

非常に長い時間空虚なままであったこの空間は、特にコンサートルームは、最近ではその最良の音響状態によってたびたびハリウッドのプロダクションに使われたりしている。またわれわれが撮影をおこなった 2004 年の夏以後、建物自体の所有者が変わっている。しかしこの建物の果たす未来は未だ不明のままである。

概要

日本におけるドイツ 2005/2006 山口 | ベルリンプロジェクト

ニナ・フィッシャー & マロアン・エル・サニ / 新作インスタレーション展

「Radio Solaris / $-273,15^{\circ}\text{C} = 0 \text{ Kelvin}$ 」 (ラジオソラリス / $-273,15^{\circ}\text{C} = \text{ゼロケルヴィン}$)

日時：2005 年 10 月 1 日（土）～11 月 27 日（日）（※火曜および 10 月 27 日休館）

10:00～20:00（入場は 19:30 まで）

会場：山口情報芸術センター スタジオ B ほか 入場無料

関連イベント

(日)フィッシャー & エル・サニ / アートレクチャー「展示作品解説 & これまでの活動について」

10 月 1 日（土） 15:00～17:00（逐語通訳あり） 会場：1F ホワイエ 無料

(月)フィッシャー & エル・サニ / 映像作品「TOKYO STAR」(2002) 78min 上映

出演：中島美嘉、加藤ミリヤ

10 月 2 日（日） / 10 月 10 日（月・祝） 各日 1 回目 12:00～ / 2 回目 16:00～ 会場：スタジオ C 無料

(火)関連映画作品上映 / アンドレイ・タルコフスキー監督作品「惑星ソラリス」(1972) 165 分

10 月 3 日（月） 19:00～ 会場：スタジオ C 入場料：500 円

(水)シリーズ映画史を読み解く「アンドレイ・タルコフスキー監督作品特集」 + 「都市と映像」特集

11月12日(土)～27日(日) 土・日のみ 会場：スタジオC

入場料：500円 11月27日(日)のレクチャーは入場無料

上映作品

2005年11月12日(土)

- ・14:00～15:50 「動くな、死ぬ、甦れ!」(監督：ヴィターリー・カネフスキー／1989年／モノクロ／105分)
- ・16:20～18:20 「殺し屋」(監督：アンドレイ・タルコフスキー／1956年／モノクロ／20分)
「僕の村は戦場だった」(監督：アンドレイ・タルコフスキー／1962年／モノクロ／94分)

2005年11月13日(日)

- ・14:00～15:50 「一年の九日」(監督：ミハイル・ロンム／1961年／モノクロ／109分)
- ・16:20～19:10 「惑星ソラリス」(監督：アンドレイ・タルコフスキー／1972年／カラー／165分)

2005年11月19日(土)

- ・18:00～19:50 「鏡」(監督：アンドレイ・タルコフスキー／1975年／カラー／108分)

2005年11月20日(日)

- ・14:00～15:10 「ゴダールの新ドイツ零年」(監督：ジャン＝リュック・ゴダール／1991年／カラー／62分)
- ・15:40～18:25 「ストーカー」(監督：アンドレイ・タルコフスキー／1979年／カラー／163分)

2005年11月26日(土)

- ・14:00～16:20 「日陽はしづかに発酵し・・・」(監督：アンドレイ・ソクーロフ／1988年／カラー／138分)
- ・17:00～19:10 「ノスタルジア」(監督：アンドレイ・タルコフスキー／1983年／カラー／126分)

2005年11月27日(日)

- ・13:00～15:00 「DEMONLOVER」(監督：オリヴィエ・アサイヤス／2002年／カラー／120分／R-18)
- ・15:30～18:00 「サクリファイス」(監督：アンドレイ・タルコフスキー／1986年／カラー／149分)
- ・18:10～19:40 レクチャー「タルコフスキー以前・以後」講師：堀家敬嗣(山口大学教育学部助教授)

<山口情報芸術センター(YCAM)へのアクセス>

■山口宇部空港から

- ・乗合タクシーでYCAMまで 約1時間(1500円) ※前日18:00までに予約が必要 大隅タクシー0120-31-0860
- ・空港連絡バスでJR新山口駅まで 30分(870円)

■JR新山口駅から

- ・JR山口線湯田温泉駅下車、徒歩20分／タクシー5分
- ・JR山口線山口駅下車、徒歩20分／バス10分(中園町か済生会病院前下車)／タクシー5分
- ・防長バス25分、中園町下車

■自動車利用

- ・山陽自動車道で防府東ICから30分 ・九州・中国自動車道で小郡ICから15分

<お問い合わせ> 山口情報芸術センター(広報担当：小滝)

〒753-0075 山口県山口市の中園町7-7

TEL: 083-901-2222 FAX: 083-901-2216 E-mail: information@ycam.jp <http://www.ycam.jp/>